

保育者養成校における言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う授業の実践

藤本 明美

抄録

言葉の獲得に関する領域「言葉」に「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う（傍線筆者）」と示されている。保育者を目指している学生自身、語彙の少なさ、表現力の乏しさ、子どもの前で話をすることに不安を抱えていることが多い。そこで、保育者養成校において学生が言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養い、発表する力を向上させるために、どのような授業が有効であるかの検討を試みた。

授業内容としては、領域「言葉」のねらいと内容を抑えながら、オノマトペ（擬音語や擬態語）や詩が持つ響きやリズムの面白さを表現する体験や、感覚を研ぎ澄ませて自然物などへ向き合い言葉に対する感覚や語彙を豊かにする学習、牛乳パックで手軽に作成した人形を使って創作したお話を発表するなどをアクティブラーニング型で取り組んだ。合計8コマ分の学生たちの振り返りシートをもとにアンケート回答結果の単純集計と自由記述の分析により考察を行った。個人の自己探求と、グループでの共同探求を連動させ、学生自身が様々な課題を乗り越えたいと思える足場架けを教員や学生同士の関係性の中で作り上げていくことの重要性が明らかになった。

キーワード：保育者養成校 言葉 表現 オノマトペ 人形劇 授業設計 アクティブラーニング

1. はじめに

保育所、幼稚園、認定こども園等において、子どもたちは毎日の生活の中で心が動く豊かな体験や自然の美しさや不思議さに出会ったり、また友達や保育者との関わりで生まれたりする体験などによって言葉に対する感覚が養われていく。子どもたちの豊かな言葉の育ちは、それらの豊かな物的環境、自然環境、人的環境の中で育まれていく。

平成29年に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の言葉の獲得に関する領域「言葉」には「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う（傍線筆者）」と示されている。まず三法令において、子どもの言葉に対する感覚や表現する力を育むために、保育者がどのようなかかわりをするのが重要だと示しているのかを要約する。それを手立てとして保育者養成校において学生はどのような力を身に付ける必要があるのかを明らかにする。そして、授業実践を元に、保育者となる学生自身が言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養い、発表する力を向上させるために有効な授業構成について、学生の振り返りシートとアンケートをもとに考察していく。

2. 子どもの言葉を育むための保育者の関わり—幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領より—（以下、保育所保育指針の表記で記載する）

言葉の獲得に関する領域「言葉」には「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」と示されている。まず三法令において、子どもの言葉に対する感覚や表現する力を育むために、保育者がどのようなかかわりをするのが重要だと示しているの

かを要約する。

2-1 乳児保育に関わるねらい及び内容「身近な人と気持ちが通じ合う」に示されている保育者に必要な力

乳児にとって、人に関する基本的信頼感の育ちと共に、コミュニケーションの土台が作られていく大切な時期であるとして、温かく受容的・応答的な保育者の関わり的重要性が述べられている。子どもが言葉を発したいという意欲が育まれるように、楽しい雰囲気の中で言葉のやり取りを楽しめるように優しくかかわっていく。

2-2 保育内容「言葉」に示されている保育者に必要な力

1歳以上3歳未満児は、片言から二語文、ごっこあそびのやりとりができる程度へと、大きく言葉の習得が進む時期である。1歳以上3歳未満児の言葉の獲得に関する領域「言葉」におけるねらいは次のように示されている。

- ①言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。
- ②人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする
- ③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

言葉を交わす保育者や友達などへの安心感と信頼感を基盤として、日々の生活の中で保育者などが発する言葉、表情、声色、身振りなどを模倣したり、遊びのなかに取り込んだり、友達とのやりとりを楽しんだりなど、他者との関係性と共に言葉を獲得していく。そうした発達を支えるためには、保育者が子どもたちに言葉の持つ響きやリズムの面白さや美しさ、言葉を交わすことの楽しさなどを感じ取ることができるようなやり取りを心掛けることが重要となる。子どもが発した言葉や表情、身振りを丁寧に受け止め、応答的なやり取りの中でこそ、心が通い合った豊かな言葉の世界が広がるのである。子どもは日々の生活や遊び、お気に入りの絵本などのなかで繰り返し使う言葉から親しみをもって聞き分けることができるようになり、自ら真似をして使うようになる。やがて、身の回りのものを別の物に見立てて遊んだり、何かのふりをして遊んだりなど言葉の習得と共に象徴機能が発達していく。

ごっこ遊びなどの中で保育者が擬音語や擬態語、場面にあった言葉を話すことが、子どもの言葉に対する感覚や語彙を豊かにしていく。子どもの関心を持ったことに応答的にかかわることによって、子どもはさらにイメージを膨らませ、ふりやなりきることを楽しみ、自ら言葉を使おうとする意欲を高めていくのである。

また、子どもは保育者を仲立ちとして子ども同士の関わりを楽しむようになる。保育者が子どもの気持ちを代弁したり、さらにやり取りが引き出されるような応答をしたりすることで、子どもは言葉で思いをやりとりする喜びを味わう。保育者の言葉が子どもの言葉を生み、遊びの楽しさを広げるのである。

3歳以上児の言葉の獲得に関する領域「言葉」におけるねらいは次のように示されている。

- ①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。

子どもは身近な人との関わりや心を動かされる体験が子どもの気持ちを高め、言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な表現を使うことができるようになる。

筆者が幼稚園教諭をしていた時に会った子どもたちの中にも、身体を動かすことは大好きで活発だが、言葉を発することが極端に少ない年長児の男子がいた。家庭の中でも2歳上のお兄ちゃんばかりが話をし、その子の声を聴くことがあ

まりないと保護者も心配されていた。夏、園の裏山へ遊びに出かけたときにその男児がクワガタムシを見つけて捕まえた。クラスの子どもたちは、皆大興奮してその男児の周りに群がり、クラスで飼育していたカブトムシと戦わせようということになった。どちらが強いのか、みな予想を立てて応援した。当然男児は自分が捕まえたクワガタムシを応援した。見たこともない高揚した表情で、聞いたこともない威勢のいい声だった。バラバラだった子どもたちの声援がだんだん一つのリズムにのり、それぞれ応援する子どもたちの気持ちもまとまっていった。そして、見事クワガタムシがカブトムシを倒して勝った。男児の声は雄たけびに変わり、クラスの友達もその男児の身体をタッチしながらともに喜んでいる姿が見られた。その日を境に、家でも保護者が驚くほど快活にしゃべるようになったと話してくださった。クワガタムシとカブトムシと友達との関わりが子どもの気持ちを高め、言動に変化をもたらした出来事であった。

このように、一瞬にして変化を遂げる事例は数少ないが、言葉でうまく表現できなくても、心が動かされるような体験が具体的なイメージとして心の中に蓄積されていくことで、保育者や友達に伝えたい気持ちが膨らんでいく。楽しい活動や友達との関わりで生まれる体験や、自然の美しさや不思議さに触れたとき、子どもが思わずつぶやく言葉を拾い、その思いに共感し、応答する友達や保育者という存在がいて、子どもたちは他者に自分の思いをわかってもらえる喜び、分かち合える喜びが芽生えるのだ。

また、言葉は意味や内容を伝えるだけのものではなく、響きやリズムなど音としての楽しさや美しさがあり、言葉を覚えていく幼児期には、保育者はそれらに気づくような言葉遊びや環境をつくることが大事であるとされている。幼児期においては、生活を通して言葉の様々な楽しさや美しさに気付くことが、言葉の感覚を豊かにしていくことにつながるのである。保育者は子どもの表現を受け止めて子どものイメージの豊かさが言葉の豊かさにつながるように応じる必要がある。つまり、子どものイメージの豊かさは、言葉の豊かさにつながっていくことになるのである。

2-3 研究の目的

以上、3法令から保育者としての子どもの言葉をはぐくむ専門性とはどのようなものかを要約してみたところ、保育者のもつ言葉の感性や豊かな表現が重要であることが明らかである。現在、若者のコミュニケーション能力低下が指摘されて久しい。学生自身も語彙の少なさ、表現力の乏しさが子どもと関わる時に不安であり、また子どもの前で話をするごと自体が緊張してしまうと本授業受講の60%の学生が訴え、克服したい課題だとしている。

そこで本稿では、保育者となる学生が言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養い、発表する力を向上させるためにどのような授業が有効であるかを検討することを目的とする。

3. 授業構成

3-1 授業実施状況

実施期間：2021年4月～6月8回

受講者：保育者養成の短期大学1年生「幼児と言葉」を履修している43名を21名と15名の2クラスに分けて対面で実施した。

3-2 研究の方法

授業ごとに振り返りシートを配布し、自由記載で記載された学びの成果をカテゴリー化し全体の傾向を質的に把握する。そして、講義の最終回で得た全体のアンケート結果を定量的に把握し考察の手がかりを探る。

3-3 授業の目標と内容

授業の目的は2つある。一つ目が言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養うこと、二つ目が豊かな言葉の表現を発表

できることである。

表1は、幼児と言葉の授業のシラバスである。適時、言葉の獲得に関する領域「言葉」のねらい及び内容を確認し、子どもの育ちを理解しながらアクティブラーニング型で取り組んだ。第1回・2回で自己紹介カードを作成し、子どもに適切な言葉で話すことを模擬実践した。言葉遊びや歌遊びを楽しむパネルシアターも紹介した。3回目は、身近に見たり感じたりしたことをオノマトペで表現して、ものを見る・聞く感性を高めながら言葉に対する感覚や表現する力の促進を図った。4・5回目に「のはらうた」(工藤直子)の詩のリズムや響きや面白さを感じ取って言語と身体における表現をグループと個人で行い発表した。グループで多様な接続詞を使ったお話づくりや、「あいうえお」で始まるお話づくりリレーなどを体験した。課外学習として、日常生活の中で見る「はっ」とするような自然の光景や様子などを写真とり、言葉を添えて写真と共に提出する、という自然物などへの感性を養い、言葉に対する感覚や語彙を豊かにすることの促進を図った。6・7回目には3、4歳児対象のミニシアターの準備を行った。グループでお話づくりをし、牛乳パックでパクパク人形作成し、舞台上で上演できる練習を行った。8回目にはお互いの発表をみて学び合った。

表1 幼児と言葉のシラバス (全8回)

回	項目	内容
1	①目標の確認 ②保育・幼児教育における言語表現について ③自己紹介カードの作成	①シラバス紹介 ・言葉の面白さを感じ、自らの言語表現力を総合的に伸ばす ・児童文化財の活用知識、作成方法を学び、実践発表する技術を修得する。 ②保育内容「言葉」のねらい及び内容 ③自己紹介カードの作成の目的と方法、発表方法の説明 子どもと仲良くなるためにペープサート、スケッチブック、ボード、パペット、バタバタカードなどを利用した自己紹介グッズを作成・練習する。(課題)
2	④自己紹介カードを使って適切な言葉、表情で子どもに向けて自分のことを伝える ⑤パネルシアター	④自己紹介カードを使って子どもを対象とした適切な言葉、表情で発表。ねらいに向けて各自目標を立てて臨み、発表後に振り返りシート記入。 ⑤児童文化財の一つであるパネルシアターで歌遊び、クイズ、お話などを見せる。ブラックパネルシアターなど、作り方や仕掛けの紹介をする。演じる体験をさせる。
3	⑥保育内容「言葉」のねらい及び内容 ⑦⑧豊かな保育を支える言語表現 オノマトペの世界	⑥指針をもとに保育内容「言葉」の言葉の感性や表現について書かれていることを再度確認し、学習の目的・目標を共有 ⑦オノマトペ(擬音語・擬態語)を理解し、使い易くする ・絵本、歌に出てくるオノマトペを楽しむ ・校舎の外に出たり(畦道)、窓から顔を出して自然の中で聞こえてくる音(風・鳥・空調・車…)や見えている事(雲・日差し・木・人…)の様子を感性豊かに受け止めてオノマトペで表現して書き留める。 ⑧オノマトペカルタをグループで作成する。 50音のうち、1グループ5枚ずつ。3歳児以上くらいが楽しめる内容で、言葉の頭にオノマトペをおいて作成。授業の目的はオノマトペで表現を広げることにあるため、読み札のみの作成にとどめた。 ・全体で共有し、各自振り返りをする。

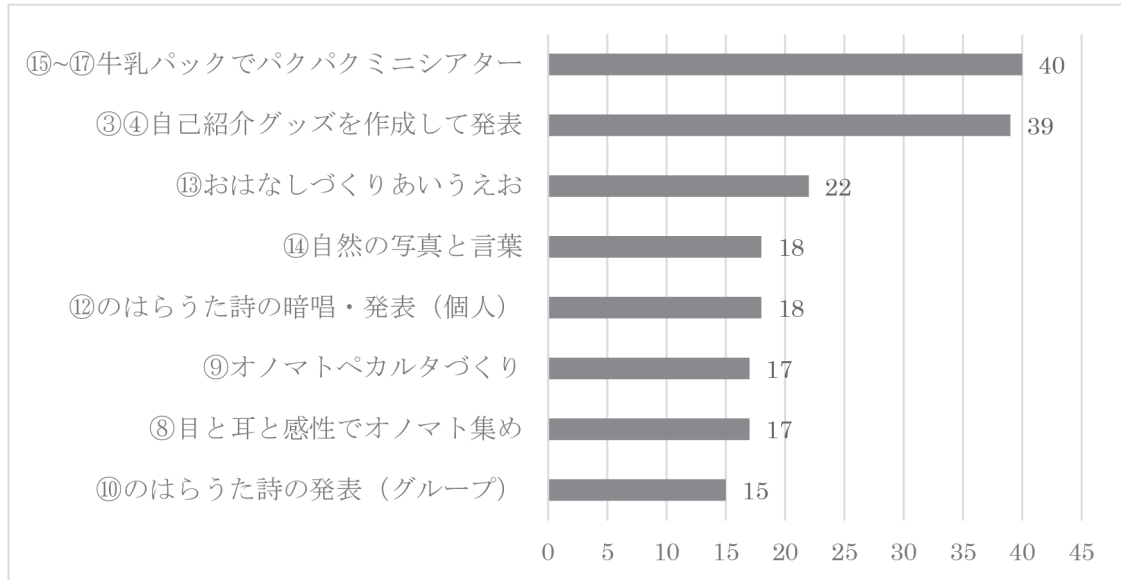
回	項目	内容
4	⑨豊かな保育を支える言語表現—「のはらのうた」輪読—	⑨「のはらのうたⅠ・Ⅱ・Ⅲ」(工藤直子)の詩をグループで輪読する。詩の豊かな感性を受け止め、作者(メダカ・もみじなど)の気持になって味わう。言葉の持つ響きやリズムの面白さや美しさを感じながら、グループで身体表現と群読の手法を使って言語表現する方法で練習し発表する。 来週までに1点好きな作品を暗唱して一人ずつ発表する。(課題) 「のはらのうたⅠ・Ⅱ・Ⅲ」(工藤直子)より おがわのマーチ・おと・もみじのワルツ・ほめたたえのうた・ でたりひっこんだり・みず・おれはかまきり・ゆきのたび・ じゃんけんぽん・きをつけ・あいさつ・くちばし・なかま・ おにあい
5	⑩声の表現・抑揚 ⑪豊かな保育を支える言語表現—「のはらのうた」暗唱発表— ⑫ことばあそび ⑬即興おはなしづくり ⑭自然の写真と言葉	⑩発声練習として、表情豊かに言葉の抑揚を楽しめる「あⅡ」(谷・谷川・波瀬1986)を群読。クラス全体や、半分に別れて声の出し方を聞き合って学ぶ。 ⑪一人ずつ「のはらうた」暗唱発表。 ・振り返り ⑫ことばあそび：・頭文字が同じ言葉あつめ ・まじかるバナナ など ⑬即興おはなしづくり：・あいうえお劇 ・接続詞でお話展開 ⑭日常生活の中で見る「はっ」とするような自然の光景や様子などを写真とって一言言葉を添えて写真と共に提出する。(課題)
6	⑮パクパク人形—お話と人形づくり—	⑮・牛乳パックでパクパク人形の作り方2種類を説明 ・3～4人の1グループでお話づくりをする。3～4歳くらいの子どもが楽しめる内容とする。どこで誰と誰が何をしていたら、どんな事が起きてどうなったのか、など起承転結を意識しながら5分以内で終わる作品。 ・ナレーターを入れずにすべてセリフとして伝える。 ・オノマトペや豊かな言葉を意識して使う。 ・必要な人形を作成し完成させる。(課題)
7	⑯パクパク人形—発表練習—	⑯・小道具など必要なものを作成 ・発表練習：人形の目線、人形の表情・動かし方、声、会話、舞台から人形の出し方・引っ込め方、グループのチームワーク
8	⑰パクパク人形—発表—	⑰パクパク人形ミニシアターグループ発表 ・グループの発表は子どもになったつもりで参加し、演じている人からの問いかけがあれば答える。

3 結果と考察

本稿では、保育を支える学生が言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養うこと、そして豊かな言葉で発表できることを目標とした授業を実践してきた。学生は語彙の少なさ、表現力の乏しさ、子どもの前で話することに不安を抱えていることがわかったが、どのような授業が有効であったか本講義がすべて終わる8コマ目の後に、学生に振り返りアンケートを実施した。「自分自身のことばの感性、表現力の向上に役に立ったと思う授業内容にチェックしてください。(図1)」という質問に対して学生の回答では、「牛乳パックでパクパク人形シアター」がもっと有効な授業であったことがわかった。なぜ「牛乳パックでパクパク人形シアター」が学生の支持を得たのか、何がどのように向上したのだろうか。また、支持

が低かった授業に対してはなぜだったのか、学生はそこから学ぶことはなかったのかなどを分析していく。

図1 自分自身のことばの感性、表現力の向上に役に立ったと思う授業内容にチェックしてください。(N = 43 複数回答可) (番号は表1. シラバスに振っている授業の項目番号)



3-1 牛乳パックを使ったパクパクミニシアターの考察

先に述べたように学生が持つことばの感性や表現力の向上への課題に対してもっと有効であるとされた授業は「牛乳パックのパクパクミニシアター」であった。本授業は初回から学んだことの総合的な力を使ってチャレンジする設計であった。授業の構成は、2コマかけて学生同士が話し合い、協力し合うプロセスの中でそれぞれの得意不得意を補い合いつつ制作、お話づくり (言葉選び)、台詞を覚えて役になりきって表現、メンバーの関係性の中で演じる練習などを経て、3コマ目に3~4歳児を対象と想定した成果発表を鑑賞し合うという双方向性の学びを行った。お話と人形を作る創造性、適切な言葉を選ぶ感覚、グループで協力して作り上げる共同性、オノマトペを効果的に使って表情豊かに抑揚をつけて話をする表現力、さらに、人形を使った表現など、保育内容表現の領域にも関わる内容として総合的な課題であった。学生の感想に、「はじめは『無理』と思えるような課題だが、一人ではなくグループで協力するうちに形になって発表を迎えるというプロセスに楽しさと成長を感じた」と書かれていた。つまり、授業構成のプロセスこそが学生が成長を感じる有効な授業となることの鍵を握ると言える。

また、「のはらうた」の詩の暗唱の時にみられた、「緊張して頭が真っ白になったり、恥ずかしくて表現できなかった」というような感想は一つも見られず、むしろ「楽しかった」「思ったようにうまくできなかったが、やってみることで学びになった」「ほかのグループの作品を見て、改善点を見つけられた」などのポジティブな発言に終始していた。発表に苦手意識をもつ学生にとっては、自己紹介カードやパクパク人形など何かを持って表現することと、さらに一人より仲間が存在が何より安心につながり、結果的に成長を感じる有効な授業になったのではないかと分析できる。しかし、一人で発表できるようになることも学生には必要なことである。つまり、学生が過大な不安を感じる場合には、それを乗り越える方法や技術を提供し、最終的に成功体験もしくは、意欲的に次へのチャレンジができるための見通しを学生がもてるような足場架けを教員が意図的に、もしくは学生同士の協同の中で生まれるような仕組みづくりを丁寧にする必要があると言える。

この分析で実際に教員があまり意図せず行った個別的な足場かけが有効だったのかもしれないことに気付いた。例えば、

お話づくりで先に進まないグループに対して、イメージを突破できるような別世界の提案をして固定概念を取り払ったり、人形や小道具で思うように表現できずに困っているグループには具体的提案を試みたりすることで、学生のイメージを広げる足場架けを数々していた。授業のプロセスの中で、個々にあった足場を適切にかけていくことも重要なことであると言える。

さらに、学生にとって子どもの前で演じるというロールプレイング的な要素を取り入れたことで、子どもの目線を意識して演じ、見ている学生も子ども目線で観察することができ、現場でも役立つと思えたことが有効な授業としての実感があったのではないかと分析した。自分に何ができれば子どもが喜び、保育者として子どもの言葉の成長につながる関わりができるのかを学びたい、という学生の持つニーズに合致するように、学生と学習目標を共有することが効果的であることもわかった。

以上の分析を通して、言葉に対する感覚と表現する力を養うために有効な授業を考察する。どの授業にでも共通して言えることではあるが、アクティブラーニングとして協同的、主体的に深い学びができる授業構成を行い、プロセスを重視することの重要性が確認できた。そのプロセスに学生にとって過大な課題があれば、頑張れば乗り越えることができるレベルに方法や技術を提供したり、仲間同士で支え合って解消できるようにサポートすることも不可欠であった。さらに、学生のもつニーズとも合致する必要が認められた。

この分析や考察の手がかりとしたのは、以下の学生の振り返りである。自由記載で記載された学びの成果を5つの項目にカテゴリー化し全体の傾向を質的に把握する。

●牛乳パックという素材でパクパク人形作った感想

牛乳パックのパクパク人形(図2)に限定した理由は、授業回数が全8回というバランスから考え、人形制作に時間をかけずに簡単にできるということを最優先して、手軽に手に入り加工を施しやすい素材、そして手軽に操れる仕掛けとして選んだ。素材の形状や温かみなどに制限があるので自由にキャラクターを表現しきれないことは否めない。布やフェルト、靴下や手袋、あるいはスポンジや火薬玉を使って頭部を作るなど、それぞれ利点が異なることは口頭で伝えた。

- ・切り方や画用紙の貼るかたで牛乳パックから舌が出てきて食べ物が食べられたり、大きくなったり、変身したり、いろいろな工夫がされていて、とてもビックリしました！
- ・パクパクミニシアターは簡単に制作することができるので、その時の子どもたちの流行りや成長に合わせてすることができるからいいなと思いました。これからは、牛乳パック以外でもこれも使える、あれも使えるかなと考えながら生活したいです。
- ・形が決まっているものからパクパクを作ったので大きさがある程度決まってしまう、小さくなったのがちょっと残念でした。パクパク人形の大きさが今回小さくなってしまったので、発表する場所やこどもの人数によって、大きさを工夫するのが大切だと学びました。

●表現・動かすときの工夫

人形をもってセリフを言いながら演じるという経験がない学生たちにとって、言葉の表現、人形を使って演じる表現など様々なことを一度に求められる難しさを抱えて苦戦しながらではあったが、実際に体験してこそその学びであった。

- ・登場人物に合わせて声を変えたり、大きくしたり小さくしたり抑揚をつけたら面白い。人形の動きもオーバーアクションで大きくうなずいたり、びっくりした時や嬉しい時には大きめに動かしたりすることで、反応を分かりやすく伝えることができるので学び、実際に取り組むことが出来て良かったです。
- ・パクパク同士の目線を合わせたり人形の行動範囲を広げたりするためには、自分がお尻を落として座らずに、足を動かしながら移動することが大切で、より人形の動きがリアルに表現ができると学びました。

- ・自分の話すセリフをしっかりと覚え、照れ笑いしない、舞台から顔、頭を見せないことも気を付け、手の動き、小道具を出すタイミングなどにも気を付けてできるくらいの練習が必要。思ったより難しく、練習通りにいかないことばかりでした。
- ・実際にやってみると自分が話しているのとパクパク人形を合わせるのが難しいと思いました。

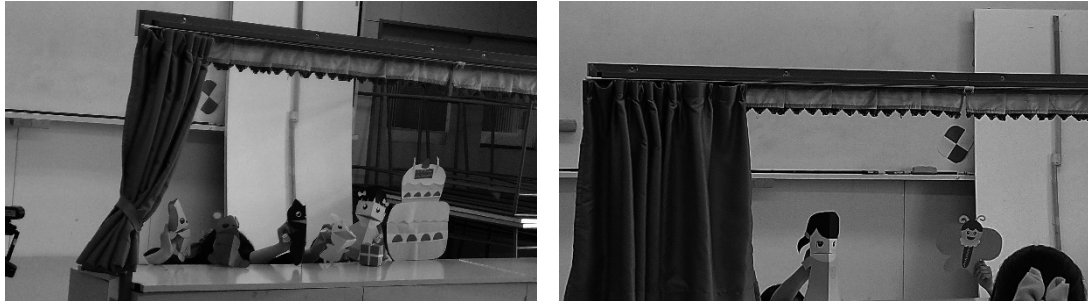


図2：パクパク人形ミニシアターの様子

●子どもとの関わり

3、4歳児対象に作った人形劇を、保育者として演じて見せるということと子どもとの関りを学び、子どもの気持ちになって鑑賞することで子ども目線での気づきがあり、双方向で学ぶことができた。

- ・人形をパクパクさせることで喋らすことができるので、子どもたちに親近感を与えることができました。
- ・子どもは、登場人物の気持ちを想像して「うれしい」「楽しい」「悲しい」など様々な感情を抱き、人間の心の変化を知ることができ、感情が豊かになっていくんだらうなと感じた。そして、子どもは大人の感情を敏感に感じ取るので、教えようと必死になったり、つまらなさそうに話したりしていると、聞いている子どもは楽しむことが出来ないから、保育者も一緒に楽しむことが何より大切であると改めて気付かされた。
- ・擬音語を言葉に表現して伝わるように言ったり、セリフをリズムカルに言うことでストーリーに聞き入ってしまうことに気づきました。子ども目線で楽しむことができました。
- ・同じ言葉を繰り返し一定のリズムで言うと、会場が一つになったように感じた。
- ・一緒に歌を歌ったり、質問を投げかけたり、巻き込みながら進めると、より楽しく興味を持って引き込まれることを感じた。
- ・子どもたちは予想外の反応や返答をするので、応答的に答えることが大事だと思った。
- ・参加型のシアターのほうがそのストーリーの世界観に入っている感じがして見ている側もとても楽しいなと思いました。

●話の内容

他のグループの作品を見ることでお話づくりのイメージの広がりを学ぶことができた。

- ・鳴き声で十二支の問題を作ってみたり日本の文化に触れたり、すごく良い内容だと思いました。
- ・物語の中に歌を入れたり、おたまじゃくしがカエルになって出てくる、のような勉強になることを入れるのも参考にしたいと思いました。短い劇だけど絵本や紙芝居とは違うワクワク感があって楽しかったです。
- ・自分で子どもの年齢に合わせたストーリーを考える難しさを痛感した。どれぐらいに言葉なら理解できるのか、どんな表現なら子どもにとってどんな影響を与えるのかを考えながら物語を作るのは正解がわからずとても苦戦した。

●取り組みの感想

- ・今回パクパク人形劇をやってみた感想ですが、初めての事ながらとても楽しめました。最初は絶対出来ないと思って

いたほどでしたが、取り組むうちに工作は楽しいし、グループでどんなストーリーにするのか話し合うのもとても有意義でした。今日の本番については計画不足のためにグダグダとしてしまいましたが良い経験になりました。本当はもっと小道具や内容、方法などをより見直し、改善して次は完璧な状態で臨みたいですが、それも惜しくこの授業は今回で終わりです。とても残念ですが、この活動を通して自分は物語を作る・考える・披露するといった事の楽しさを知れて良かったです。話は変わりますが、他のグループの発表も自分たちのものとは違い、様々な工夫が成されていました。自分では考えられないアイデアばかりなので自分にはまだまだ発想力が足りないと感じました。自分のだけに囚われるのではなく、他の人の作品を見ることで、今までになかった新たなアイデアが生まれていくのだと考えます。今回のパクパクミニシアターは自分にとってとても有意義な活動となりました。

3-2 教材の分析—授業のプロセスの中で成長を実感できる構成の重要性—（以下番号は、表1. シラバスの項目番号を指す）

本稿の主題である言葉の持つ響きやリズムの面白さや美しさを感じる体験や自然物などへの感性を養い、子どもと言葉を交わす力を養っていくために、保育者が擬音語や擬態語、場面にあった言葉など、言葉に対する感覚や語彙を豊かにしていけることと、保育者の言葉が子どもの言葉を生み、遊びの楽しさを広げることを意識できるように各回の授業を進めてきた。教員として教材選びで特にねらいに合致して適切だと思っていた⑧「目と耳と感性でオノマトペ集め」⑪⑬「のはらうたの輪読と暗唱」⑭「自然の写真と言葉」は図1の「ことばの感性、表現力の向上に役に立ったと思うもの」において学生の35%～42%と低い評価であった。その食い違いを生んだ原因としては、授業構成にあると予測して分析してみた。

【教材1】

⑧「目と耳と感性でオノマトペ集め」では、まずオノマトペは身の回りや歌、CMのキャッチにも多く使われており、短い言葉で感覚的な表現ができる特性があることを学んだ。その後、教室の窓から顔を出して自然の中で聞こえてくる音（風・鳥・空調・車…）や見えている事（雲・日差し・木・人…）の様子を感性豊かに受け止めてオノマトペで表現して書き留めるという授業を行った。静けさの中、耳と感覚を研ぎ澄ませ学生は集中して取り組んでいた。終わってからの振り返りで「日頃はイヤフォンをつけていることが多いので自然の音を感じたことや意識したことはほとんどなく、とてもとても新鮮な驚きがあった！」「同じ環境を見ているのに、ひとりひとり感じ方や表現が異なり、面白かった」などのコメントが多く、心が動いた感触はあったことが読み取れた。しかし、自分自身のことばの感性、表現力の向上に役に立ったかどうかは別の問題であるのではないだろうか。授業で矢継ぎ早に、オノマトペカルタを作るなどの作業へ上げていかに、時間の都合で窓から外界を感じるのではなく、大学は田園に囲まれているという素晴らしい立地であることを活用して教室から飛び出て、五感を使って自然と個々の感性が向き合う余裕、感じた言葉を丁寧に共有しつつ言葉の感覚と感性を磨き、次の授業で行う「のはらうた」の詩と体験をつなぎ合わせるといふ授業の構成に組み替えることでさらに立体的な体験となり、学びと成長感を得られたのではないかと考える。

【教材2】

⑪⑬「のはらうた」に関しては、工藤直子さんの心が解放されるような素晴らしい感性で自然を見つめる表現力を大いに学び、それを子どもに伝える力をつけてほしいというねらいをもって取り組んだ。学生が詩の豊かな感性を受け止め、作者（めだか・もみじ・みずなど）の気持ちになって味わう。そして言葉の持つ響きやリズムの面白さや美しさを感じながら、グループで身体表現と群読の手法を使って言語表現する方法で練習し発表する、という授業と、2回目には好きな作品を暗唱して一人ずつ発表するという2段階で構成した。学生が書いた振り返りには、詩のリズムや言葉には感銘しつつ、

「とにかく緊張して詩がとんでしまう」「なりきって表現しようと練習してきたが恥ずかしくてできなかった」「人前が苦手で顔を上げられない」など発表すること自体の自己課題を60%の学生が書いていた。緊張せずに発表するのはそもそも難しいことではあるが、練習してきた成果が出せるレベルになるように、その実態を把握して恥ずかしさの殻を取り除く足掛けとなるワークも授業の構成に取り込む必要があると感じた。今回は、暗唱発表前のウォーミングアップを兼ねて、表情豊かに言葉の抑揚を楽しめる「あⅡ」（谷・谷川・波瀬 1986）を群読した。クラス全体や半分に別れて、詩に書かれていることが抑揚の変化で子どもに伝わるかを学び合った。学生は一生懸命ではあるが教員としての指導力の弱さを感じるほど出来映えが良くない状況のまま、暗唱発表へと進めたことが授業の構成として改善する必要があった。

自己紹介カードやパクパク人形など、拠り所とするものを手にしていないことが不安を感じた要因かもしれないが、「自己紹介」で一人一人発表をした時の反省を活かして「前回より堂々とできた」と成長を感じていた学生もいた。その学生がどのようなことを心掛けたのかを伝えてもらう機会を作るなどして、それぞれの方法で共に乗り越えていける関係性を授業の中で構築したい。

【教材3】

⑭「自然の写真と言葉」は、日常生活の中で見る「はっ」とするような自然の光景や様子などを写真と一言、言葉を添えて写真と共に提出するため、個人で取り組む課外学習として位置づけていた。作品事例は図3に掲載しているように、子どもと散歩をしたり遊ぶ中で子どもの「はっ」とした発見を保育者なりの感性豊かな言葉で表現したり、子どもが見落とした面白い現象に保育者が気づくことができる感性と共に、子どもが興味関心をもてるような言葉で表現して伝える力を養えるというねらいをもっていた。さらに「のはらうた」の学習をしている回と絡め、体験と詩の言葉が大いに参照できることを期待していた。作品は各自のスマートフォンで撮影している学生が多くて画質や見栄えはたいへん良い。どれも「はっ」とする素晴らしい場面を撮っていた。まさに、捉えた写真の場面のような事象を日々子どもと共有して言葉のやりとりすることが蓄積できれば、言葉も心も育つだろうと思えるものだった。しかし、言葉選びについては、見たまま「きれいなお花だね」「あおいお空だね」という一言が多く、表現や語彙についてはさらに磨く必要を感じた。

教室の環境としてプロジェクターを準備していなかったので全員で鑑賞できずに、個々のパソコンや携帯で情報を共有しながら見るにとどめた点にも課題があり、一人の感動を共有するプロセスを丁寧に授業の中に入れていく必要を感じる。

図3：写真と言葉



「おれのながいしっぽかっこいいだろ」



「しずくはおちそうでおちないね」



「このあななんだろう」

以上、保育者となる学生が言葉に対する感覚を磨き、言葉で表現する力を養うために取り組んできた3つの授業構成を分析することで、プロセスの改善する具体的な方法を見つけることができたのは今後につながる成果となった。

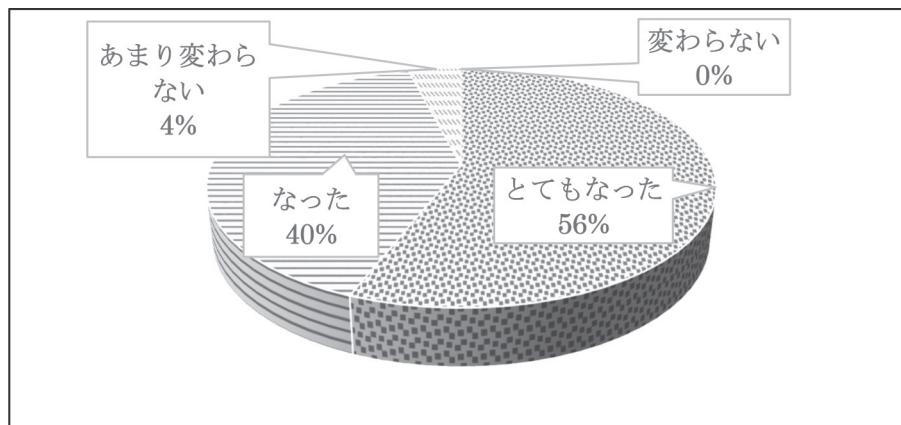
3-3 学生の環境を感じる感覚と言葉に対する意識の変容

学生が自分自身のことばの感性、表現力の向上に役に立つ授業づくりを目的に学習の構成の中に、保育者が擬音語や擬態語、場面にあった言葉など、言葉に対する感覚や語彙を豊かにしていけることと、保育者の言葉が子どもの言葉を生み、

遊びの楽しさを広げることを常に意識できるように進めてきたが、図4の結果から、ことばの感性や表現力の土台となる意識が大きく変わってきたことが伺えた。「以前より自然現象などに意識が向くようになったか」の質問に対して、「とてもなった」が56%、「なった」が40%で合わせて96%が意識に変化があったことを実感していた。

子どもは保育者や友達同士の関わりや、心を動かされる体験を通して言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な表現を使うことができるようになる。保育者が感性豊かに周囲の環境の変化を言葉にすることによって、子どもが、したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことを誰かに伝えたいという思いを言葉で適切に使えるようになっていく。その意味で学生の環境を感じる感覚の変容に伴う意識の変容は大きな前進だといえる。学生の自由記述の振り返りを2つの項目にカテゴリー化して把握する。

図4：以前より自然現象などに意識が向くようになった（N = 43）



●環境を感じる感覚と言葉に対する意識の変容

- ・授業を受けるまでは言葉はなにか意思を伝える手段程度にしか思っていたのが、今では言葉で遊ぶことの楽しさや面白い一つの遊びになることを学びました。最近では見たものを子どもたちに興味関心を持って聞いてもらうにはどのように伝えるか頭の中で練習するようになりました。
- ・前までは子どもと接する時に「すごいねー」とかしか言えなかったのですが、外を眺めてオノマトペを集める授業などを通して、今では感覚的な言葉を使ったり、語彙がたくさん増えて少しは豊かな言葉で子どもの気持ちに沿った言葉が言えそうです。これからも夜の散歩やドライブなどで意識して周りを沢山観察し言葉の感覚を意識的磨こうと思いました。

●言葉そのものに対する意識の変容

- ・授業の中では、様々な言葉について触れてきましたが、自分が触れてきたことがなかったものが多々ありました。特にオノマトペです。日常の中の音は普段「音がなっているな」で済ませていましたが、この授業でそれらの音を言葉に起こした時、一つのものでも様々な音を持っていることに気付かされました。世の中には見えるもの・見えないものの関係なしに音で満ち満ちている、そんな感じです。こういった事を通して自分はより言葉について意識しないといけないと思いました。
- ・この授業で自分にはまだまだ語彙力がないことが分かりました。今後子どもの保育をしていく中で、言葉についてはしっかりと意識する必要があるものの一つです。今まで学んだことを振り返り、言葉についての知識を深め、子どもと接していく際に役立つように取り組めていけたら嬉しいです。
- ・言葉には色々な種類があることがわかった。口に出す言葉はもちろん、自然から伝わってくるものや言葉に出せない

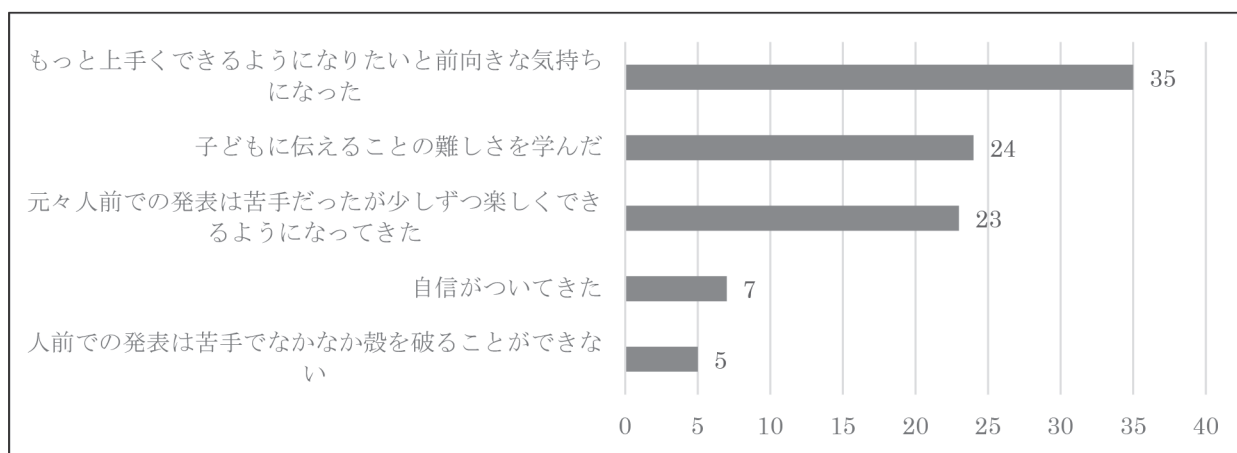
けど何かを訴えている言葉など幼児と言葉の授業を受けてからいろんな言葉に出会えた気がする。というか自分自身の関心がより深まりました。人間が何かを伝えるために発する言葉だけでなく、花や虫などから訴えかけられているようなことも言葉だと思います。他にも車の音、風、雨の音日常生活にありふれている音も言葉だと思います。

授業を受ける前と受けた後の自分を見つめて、言葉に対する意識変容したと述べているきっかけとなった授業は、図1で「自分自身のことばの感性、表現力の向上に役に立った」の評価が低かったオノマトペ探しや「のはらのうた」を題材として取り組んだ授業であったことがわかる。学生の成長は、授業の中で得た学びや体験だけではなく、日々の自己研鑽の中でこそ培われていく。つまり、すぐには役立たなかったかもしれないが、これからの成長に必要な意識を獲得することができたと言える。

3-4 言葉の発表に対する意識の変化

5回目の授業で60%の学生が人前での発表が苦手な緊張したり、恥ずかしさをぬぐえなかったりすることを自己課題として振り返りシートに書いていたが、8回目の最後の授業で「元々人前での発表は苦手だったが少しずつ楽しくできるようになった」が53%、「自信がついてきた」は16%の学生が回答していたことは大きな成果であった。「もっと上手くできるようになりたいと前向きな気持ちになった」学生は81%であった。また、11%の学生が「人前での発表は苦手でなかなか殻を破ることができない」という状況をあげていた(図5)。この変化は、発表の形式が個人とグループの違い、何も持たずに子どもの前に立つ形と、手に人形などを持つ形の違いを経験した結果として成長を感じることができたのは授業のプロセスとしては有効であったと言える。

図5：実践発表する技術について（複数回答可 N = 43）



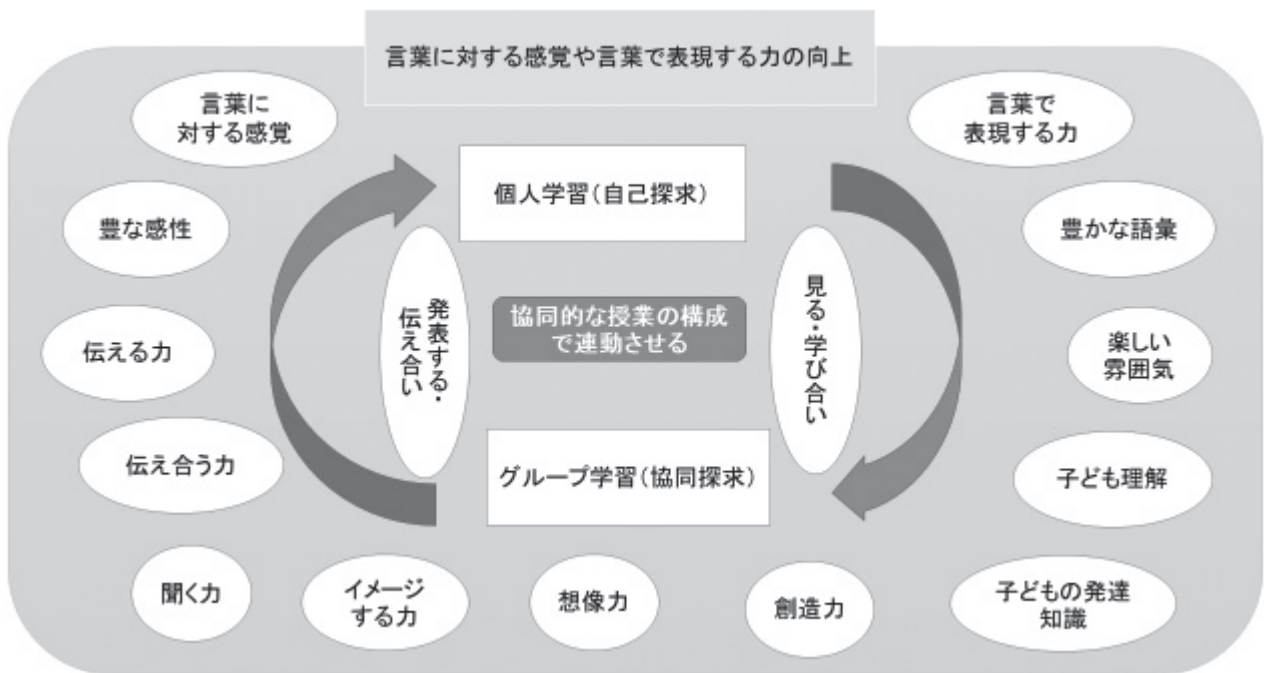
3-5 結果の考察

ここまで振り返りの記述とアンケート結果を中心に授業について分析してきた。言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養い、発表する力を向上させることを目的とした授業構成のつながりを図示すると図6ようになる。周囲に囲んでいるワードは、子どもの言葉に対する感覚や言葉で表現する力を向上させるために、保育者として必要な力を領域「言葉」から読み取ったワードであり、授業の構成でねらいとして入れてきたものである。これらを個人の学習とグループの学習を連動させながら、個人の不足する力をグループの力と教員からの足掛けや、他のグループの成果を見て学び互換性の中で自分の課題を見極めて成長したいと思えるような授業設計である。

個人学習にあたる授業は、表1. シラバスに表記している番号と項目では、①②⑥領域言葉に関する知識と理解③④自

己紹介カード作成・発表⑤パネルシアター実演を見て学ぶ⑦オノマトペ見つけ⑩言葉の表現⑪のはらうた暗唱⑭自然の写真と言葉となる。グループ学習にあたる授業は、⑧オノマトペかるたづくり⑨のはらうた（輪読）⑫ことばあそび⑬おはなしづくり⑮⑯⑰パクパク人形ミニシアター、となる。これらが関連できるように授業を立体的に構成することで、学生はできないと自信をなくしたままではなく、できるようになりたい、なれるという自分への期待値をもつことができた。

図6：学生が言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養い、発表する力を向上させるための授業の構造



4. まとめと今後の課題

本稿では、保育者養成校において学生が言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養い、発表する力を向上させるために、どのような授業が有効であるかの検討を試みた。そのため学生たちの振り返りシートをもとにアンケート回答結果の単純集計と自由記述の分析により考察を行った。

その結果、どの授業においても共通して言えることではあるが、アクティブラーニングとして協同的、主体的に深い学びができる授業構成を行い、学び合う互換性のプロセスを重視することの重要性が確認できた。そのプロセスにおいて学生にとって過大な課題があれば、それを頑張れば乗り越えることができる方法や技術を提供したり、仲間同士で支え合ったりして解消できるようにサポートすることも不可欠であった。さらに、学生のもつニーズとも合致するように目標を共有する必要が認められた。

まず1つ目に学生が「言葉の感性、表現力の向上に役立った」と感じた授業は「牛乳パックのパクパクミニシアター」が最も多かった。授業の構成は、2コマかけて学生同士が話し合い、協力し合うプロセスの中でそれぞれの得意不得意を補い合いつつ制作、お話づくり（言葉遊び）、台詞を覚えて役になりきって表現、メンバーの関係性の中で演じる練習などを経て、3コマ目に子どもを対象を想定した成果発表を鑑賞し合うという双方向性の学び合いで終わりを迎えた。総合的な力を求められる課題ではあったが、図6に示す授業構成のプロセスの中でこそ学生が成長を感じるということが有効な授業となることがわかった。

そのプロセスの中で過大な不安を感じる学生がいる場合には、それを乗り越える方法や技術を提供し、最終的に成功体験もしくは、意欲的に次へのチャレンジができるための見通しをもてるような足場架けを教員が意図的に、もしくは学生

同士の協同の中で生まれるような仕組みづくりを丁寧にする必要性があることがわかった。

2つ目に、自分に何ができれば子どもが喜び、保育者として子どもの言葉の成長につながる関わりができるのかを学びたい、という学生の持つニーズに合致するように、学生と学習目標を共有することが効果的であることもわかった。学生が自分の学びとして必要だと自覚できるような働きかけも必要であった。

3つ目に授業の中で言葉に対する感覚と言葉で表現する力が身についたことがすぐに実感できなくても、意識が変容することの重要さが確認できた。プロセスが単純で発展性が乏しく、承認欲求が満たされていないなくても、言葉をとらえる個々の意識が変わると、日常で目にするものを子どもにどうやって伝えようか。子どもにどうやって伝えたら楽しいだろう、と考えるようになった、という変容は次の成長につながり有効である。

今後の授業の展望は、図6の考察を踏まえ、アクティブラーニングとして協同的、主体的に深い学びができる授業構成を行い、学び合う互換性のプロセスを重視することを心がけていきたい。

参考文献

文部科学省 2018「幼稚園教育要領」フレーベル館

厚生労働省 2018「保育所保育指針〈平成20年告示〉」フレーベル館

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018「幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成26年告示〉」フレーベル館

谷俊治、谷川俊太郎、波瀬満子 1986「あたしのあ あなたのあ——ことばがうまれるまで」太郎次郎社エディタス

くどうなおこ 1984「のはらのうたⅠ」「のはらのうたⅡ」「のはらのうたⅢ」童話屋

藤本明美 子ども学科講師